

---

# 蠟燭の灯火

快流緋水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蠟燭の灯火

### 【NZコード】

N8119C

### 【作者名】

快流紺水

### 【あらすじ】

希望を失ったとき、逢いたい人がいた。笑つてお別れを言つたために。

病院から帰つてきて、ベッドの中にもぐりこんだ。 それでもしないと、落ち着かなかつたのだ。

階下から両親が言い合つのが微かに聞こえてきた。 それは怒りでもあり、悲しみでもあり、むなしさでもあつた。

『なんである子なのよ…！』

母の泣き叫ぶ声が聞こえた。 父はなにも言い返せなかつたようで、それ以降なんの声も聞こえなかつた。

健康診断でした血液検査により、白血球が激減していることが分かつた。もちろん、1回だけの検査では分からない。だから、期間を置いて2回再検査を行つた。他の数値は変動がほほないのに対して、白血球は下がる一方であつた。

この再検査の間に、4回ほど貧血のような状況で倒れてもいた。明らかな異常。

精密検査をし、その結果下された診断は急性白血病。 よくドラマや小説に出てくる病気か、としか思えなかつた。

死ぬんだつて。

だが、これは現実だ。

確かに身体に力が入らず、常に虚脱感を持つていた。おまけに軽くひとつ走りしただけで息が切れ、呼吸が元に戻るまで時間がかかつた。

（いつの間に？）  
遙はため息をつき、寝返りを打つ。

母の号泣が収まると、父は母にそつとお茶を差し出した。だが、その手は震えている。

『俺だつて遙がそんな病気にかかつただなんて信じたくないんだよ。』

』

湯気の立つ湯飲みに触れようとせず、ただ俯いて絞り出すかのように言った。

『だけど、なんであの子なんですか？リレーの選手になつたり、色々な部活から引っ張りだこだつた子なのよ。元気そのものなのに……。』

』

涙で目を赤くした母が悔しそうに言つ。

『本当にそうだな。』

父は頭をかきむしり、首を振る。

『代わられるもんなら代わつてやりたい。』

次の日。遙は吐き気に襲われていた。両親の気遣いで、好きなものがばかりを用意してくれているが、一切のどに通らない。

『遙、食べないと元気になれないわよ。』

母が口元まで持っていくが、遙にとつては匂いだけでもダメで顔を背けるばかり。

『ゴメン、無理。もういいよ、どうせ死ぬんだし。』

そう言い、布団を頭から被る。すると、母の啜り泣きが聞こえてきた。

泣きたいのは遙も同じだ。

家の療養は無理と判断され、翌日から入院となつた。

骨髄が合うのならば家族とすぐにでも手術をするのだが、誰一人合う人はいなかつた。こうなれば、骨髄バンクを頼るしかない。

『遙、何かしたいことある？』

母はあれから目を赤くしたままだ。

遙は母の問いにしばし考え、それから口を開いた。

（死ぬんだよね、きっと。それなら。）

『あのね、お母さん。実はね、彼氏じゃないけど、凄く大事な男友達がいるの。その人に逢いたい。』

思いもよらない返事に母は目を丸くした。

『そんな友達いたの？』

『うん。』

遙は女子高と女子大に通い、男性との関わりはそんなに多くない。それが、大事な男友達がいると言うのだから、母が驚くのも無理はない。話題にすら出てこなかつたのだから。

『どこで会つたの？』

遙はちよつと困つたように笑つた。それがまた、とても優げだ。

『インターネットで。』

母の顔が少しだけ険しくなる。だが、怒つても仕方がない。話を聞いて、願いを叶えてやりたいのだ。

『そう。』

『出会い系じやないよ。音楽繫がりだから。ほかにも色々と相談に乗つてくれてね、もの凄く優しいの。』

心配をさせないよう、やつとのことで手を伸ばして母の肩に触れる。

『凄く良い人なんだ。』

母は複雑な思いを胸に抱きながらも遙の手に触れて握つた。

『分かつたわ。その人に会いたいのね。』

『うん。』

（お別れを言いたい。）

『どうしたらいい？連絡先分かるの？』

遙は携帯電話を指差す。母は携帯電話を取つてやり、遙に渡した。

『家に呼んでもいい？』

『いいわよ。』

『その間だけ、2人だけにしてもうつていい？』

母は唇を噛み締めたが、頷いた。

『あと、病気のことも言わないで。』

『その状態じや分かつちゃうでしょ？』

遙は軽く笑つて首を振る。

『入院するまでの力を振り絞つて元気になるわよ。笑つていいの。』

『母の田から思わず涙がこぼれた。

『あんたって子は。もう。分かったわよ。やりたいようにしなさい。

『ありがとう。』

そう言い、早速大切な男友達を呼び出した。

急に呼び出され、まして初めて家に招待されたとなれば驚き、拒否しそうなものだが、その大切な男友達はあまりの懇願に折れてやつて來た。

『遙はにっこり笑つて迎え入れる。』

『いらっしゃい、紘輝。』

『ども、お邪魔します。』

紘輝は物珍しそうに部屋を眺めつつ、リビングのソファーに座った。

『急にどうしたんだよ？』

『いいじゃん、別にー。紅茶でいい？』

『ああ。』

遙は大好きな紅茶を淹れ、紘輝に差し出す。

『ね、この間コンサートに行つたんでしょ？』

遙は込み上げてくる吐き氣を抑えつつ、笑つて聞いた。

紘輝は何も気付かずに、笑つてコンサートの状況など話をした。

共通の話題は中々尽きず、気付けば3時間以上経っていた。紘輝もさすがに初めて來たことでもあるから、そろそろ出ようと立ち上がる。

『今度は一緒に行こうよ。』

『うん、そうだね。』

玄関まで見送り、その時に遙は手紙を差し出した。今の自分の状態など、大切な内容の手紙だ。

『ラブレターじゃないけど、お手紙。』

『へえ、珍しいじゃん。』

『まあね。』

『じゃあな、じちそーさん。』

『気を付けてね。』

遙は手を振つて見送り、紘輝が見えなくなつたと同時にしゃがみ込

んだ。荒れてくる息をなんとか整えようとし、冷や汗を手で拭う。  
5分ほど経つた頃、玄関のドアが荒々しく叩かれた。びっくりするが、なんとか立ち上がって開ける。そこには汗だくの紘輝が立っていた。

『なんで?』

『なんでじゃねーよ、バカ!』

そう言つなり、遙を抱きしめた。

『病氣なら病氣って言えよ。それに、この手紙。死ぬみたいじゃん。んなこと言つなよ!』

率直な言葉に、遙の目から涙があふれ出た。

『だつて、死ぬかもしないんだもん。だつたら笑つてバイバイしたかつたの。』

『なに強がつてんだよ。』

紘輝は更にぎゅっと抱きしめる。

『お前はいつも抱えてばっかりだな。』

『だけど、だけど…今度ばかりは分からないんだもん。だから、死んだつて紘輝のこと感謝しているつて、大好きって言いたかったんだよ。』

紘輝は少し離れ、遙の頬に手をやつた。

『そう言つてくれるのはありがたいけどな、死なれちゃ悲しいんだよ。負けんなよ。俺も応援するから、生きろよ。』

遙の涙は止まらず、ぼやけたままだが、それでも紘輝の顔を見上げた。

『本当に?』

紘輝は困ったように微笑み、それから遙の頭をくしゃくしゃ撫でた。

『いい加減なことで言えるかよ、こんなのは、本當だ。』

遙は嬉しくなつて抱きついた。

『ありがと。』

苦しい思いが込み上りてきたが、それ以上に温かい感情が包み込むよつこ、遙は痛さを忘れてこの瞬間を喜んだ。

紘輝が帰ったあとに戻ってきた両親は、はらはらしながら遙の部屋に行つた。

『遙?』

『なあに?』

返ってきた声は若干明るかつた。不思議そうに近寄り、ベッドのそばに座る。

『大丈夫か?』

父の心配する声が温かかった。

遙は両親に顔を向け、にこっと笑つた。まだ泣いたあの赤い目だが、儂げだつた笑みではなかつた。

『頑張れば生きれるよね?』

思いもよらぬ問いに、両親は泣き出しそうになつた。

『遙なら大丈夫。すぐに良くなるわ。』

『ああ、そうだな。お父さんも一緒に頑張るぞ。』

遙が手を伸ばすと、両親が競うように手を握りつて來た。

『一緒に生きるね。』

遙の言葉に、両親は涙がこぼれだした。

『そうだ、生きような。』

先の見えぬ、それこそどちらに天秤が傾くのかも分からぬ状況だが、それでも希望を繋げることが出来た。

遙は携帯電話を見る。消えかけた思いが、また燃えてきた。そのきっかけとなつた紘輝には感謝し尽くせないくらいだ。だが、少しでも感謝をするとしたら、まずは生きること。

遙の挑戦は今始まつたばかりだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8119c/>

---

蠟燭の灯火

2010年12月22日14時38分発行